

聖母マリア

ルカ2章16-21節

(そのとき、羊飼いたちは) 急いで行って、マリアとヨセフ、また飼い葉桶に寝かせてある乳飲み子を探し当てた。その光景を見て、(彼ら)は、この幼子について天使が話してくれたことを人々に知らせた。聞いた者は皆、羊飼いたちの話をも不思議に思った。しかし、マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。羊飼いたちは、見聞きしたことがすべて天使の話したとおりだったので、神をあがめ、賛美しながら帰って行った。

八日たって割礼の日を迎えたとき、幼子はイエスと名付けられた。これは、胎内に宿る前に天使から示された名である。

説教

2017年、新しい年のはじまりにイエスさまの名のもとに集まり礼拝をささげることができることに感謝します。

人間にはいろいろな事情があります。希望に満ちて今日を迎えている方もいれば、病の床のうえで年を越した方もいることだとおもいます。さまざまな事情・状況があります。それでも、こうやって礼拝ができることはほんとうにうれしいこと、恵まれたことだと思えます。世界にひろがるすべての教会が主のみ名をほめたたえることができますように。

マリアはこれらの出来事をすべて心に納めて、思い巡らしていた。(2:19)

きょうの福音でマリアは「思いを巡ら」します。さて、いったいどんなことを思っていたのでしょうか。人生には山もあれば、谷もあります。子どもを産んだ、出産したばかりの女性にとって、また家族にとっては喜びの時、おおきな人生の山場、クライマックスの一つだと思えます。でも、イエスが生まれた事情はルカ福音書によれば複雑です。実際、産まれたばかりのイエス

さまは飼葉おけのなかにいます。そしてこの幼子にはメシア、救い主としての栄光と苦難の人生が待ち受けています。イエスの母、マリアはどのようなことに思っていたのかを考えてみると、単純に子どもが無事に生まれたことに思いを巡らせていただけではなさそうです。

今日から始まる新しい年に、わたしにもたらされる恵みの出来事、そしてまだ隠されている試練の山、めいめいの心のうちで、マリアとところを重ねて、思い巡らせてみましょう。

1年のはじまりのきょう、主の恵みがわたしたちに、そして世界のすべての人たちのにありますように。
